

おさしづの割書を (a) 写本、(b) 八巻本、(c) 改修版、の順に提示して、その比較を試みたが、さらに作業を進めることにする。

まず、その3種の割書において、(a) のものが (b) (c) に比べて、その内容が詳しく記されているものを挙げてみたが、全体を見通すと、必ずしもそうとは言えないものも多くみられる。その例を次に掲げておく。

[D]

- (a) 明治三十三年十月十四日 刻限  
(b) 明治三十三年十月十四日 御本席御身上一昨日の午後四時頃より俄に発熱し、本部員一同集會の上神様へ御願をかけ、其願には御身上速か御なり被下次第、御障りの事第一に御願申し、指図通り運ばして貰ひますと願、尚本局より電報の事情ありますから、此間御障りの事御願申上げますと願  
(c) 明治三十三年十月十四日 本席御身上一昨日の午後四時頃より俄かに発熱し、本部員一同集會の上親神様へ御願を掛け、その願には御身上速やかお成り下され次第、御障りの事第一に御願申し、さしづ通り運ばして貰ひますと願、尚本局より電報の事情ありますから、この間御障りの事御願申し上げますと願

この場合、(a) は「刻限」としか記されず、(b) (c) は、その様子が詳しく記されている。

[E]

- (a) 明治三十九年十一月二十八日 旭支教会担任教師を山澤為蔵氏変更願  
(b) 明治三十九年十一月二十八日 旭日支教会長岡本善六辞職に付山澤為造後会長に御許願  
(c) 明治三十九年十一月二十八日 旭日支教会長岡本善六辞職に付、山澤為造後会長に御許し願

この例では、(b) (c) の方が正確である。すなわち、(a) では、「旭支教会」とあるが、正しくは「旭日支教会」である。そして、辞職する旭日支教会長が岡本善六であることが明確である。願の本筋は、山澤為造氏が支教会長に就任することにあるから、前任会長が誰であるかは、とくに問題とはならない。とほいうものの、その間の事情は (a) では要点のみ記している、ということが出来る。この点は次の例でも同様である。

[F]

- (a) 明治三十九年十二月廿三日 芦津分教会長 井筒五三郎小児身上ニ付御願  
(b) 明治三十九年十二月二十三日 井筒五三郎子息貞彦身上願  
(c) 明治三十九年十二月二十三日 井筒五三郎子息貞彦身上願 井筒五三郎小児が貞彦であることが明らかである。

[G]

- (a) 明治三十一年八月三日 独立の事情運び方御願 本局より電報にて至急教長上京の事申越されニ付御願 松村上京の御願  
(b) 明治三十一年八月三日 天理教別派独立運び方の願 押して、神道本局より電報にて至急壹名上京の事申越されしに付願 押して、松村吉太郎上京願

- (c) 明治三十一年八月三日 天理教別派独立運び方の願 押して、神道本局より電報にて至急一名上京の事申し越されしに付願 押して、松村吉太郎上京願

ここでは、(a) で「教長上京の事」とあるのに、(b) (c) では「一名上京」とある。

[H]

- (a) 本局管長死亡ニ付葬祭為 本部長公上京御願 卅五年三月廿一日  
(b) 明治三十五年三月二十一日 本局管長公死去に付葬祭の為め本部長様御上京御許下され度願  
(c) 明治三十五年三月二十一日 本局管長逝去に付葬祭のため、本部長上京御許し下され度願

ここでは、(a) において、割書と日付が逆になっている。(b) (c) に比べて、(a) は簡潔である。なお「本局管長死亡」「本局管長公死去」「本局管長逝去」と表現が変化している。逝去が一番丁寧な言い方であろう。

次に、少々異なるは認められるが、おおむね同じと思われるものをあげておこう。

[I]

- (a) 三十一年七月三十日 梅谷梅治郎身上ニ付御指図より 父四郎兵衛御本部へ常詰事上申上御願 おして悴梅治郎 分教会ニをいて勤めさしてもらう事で有升かと御願 又をしてたねの母と妹と二人分教会にて御願 本部より御一名御出張願うて役員なり支教会へさとしてもらう御願  
(b) 明治三十一年七月三十日 梅谷梅次郎身上に付前御指図から梅谷四郎兵衛本部常詰事情申上願 押して、悴梅次郎分教会の方勤める事願 押して、おたね母に妹を分教会におく事願 押して、本部より一人御出張ねがふて分教会役員部内支教会長にさとして貰ふ事願  
(c) 明治三十一年七月三十日 梅谷梅次郎身上に付、前おさしづから梅谷四郎兵衛本部常詰事情申上げ願 押して、悴梅次郎分教会の方勤める事願 押して、たね母に妹を分教会に置く事願 押して、本部より一人御出張願うて、分教会役員部内支教会長に論して貰う事願

この例は、とくに (c) で、仮名遣い (送り仮名) が整えられていることに気がつく。

以上、いろいろなパターンを選びだしてみたが、それぞれである。としても、こうして、割書を比較対象してみると、「おさしづ」の背景なり、様子が垣間見ることが出来るようだ。また理解の手がかりが、多少にしても増えるように思われる。ただし、ここでは資料が手元になかったため、早めの年代、とくに明治 20 年代前半のものとは比較できなかった。それがあれば、割書にもう少し変化がみられたかもしれない。その視点を保持しておきたい。(この項了)